

40代を前に専業作家へ転身

(1ページから続く)
機となったのは30歳を迎えようとした頃。そこで、小説を執筆する出会いに恵まれた。

打ち込める趣味もなく、そろそろ人生のやりがいを、と探していた時に何気なく読んでいたある小説の最後のページをめくると、「新人賞募集」という活字が目に入ってきた。「これだ」と思った。

応募した作品が評価されるのを想像すると、「大学入試のように答案を出してその可否を待つような、あの頃のドキドキした気持ちにまた出会えるのではないか!」と胸が高鳴った。心のどこかで、普段の仕事や生活では味わえない刺激を待ち望んでいた。計画的に物事を進めていくことをモットーとする喜多さんだが、小説を書くという趣味は唐突に始まった。

趣味だからといって手は抜けない。真剣に取り組みたいと思い、心の中で決めたこと。「30歳から5年間で10作応募し、そこで全て受賞できなかつたら、小説を書くのを辞めよう」。

本気で挑戦したいから、期限を区切ることにした。

かすかだが勝算はあった。ミステリー小説好きの製薬企業の同僚から本を借りては、電車の中で読みふけた。これが、小説を執筆する下地になった。

小説の創作は、本のタイトルになるようなオリジナリティのある短い言葉、小説のコンセプトを決めるところが出発点だ。考案したコンセプトからイメージして肉付けを行い、物語の設定に近づける。

1作目は受賞を逃したが、その後見事に軌道修正する。「ミステリーとしてどんでん返しが好きだったので、最初はトリックありきで小説を書いていたが、あまりうまくいかなかった」という反省を踏まえ、「仕掛けは仕掛けとして残したまま、舞台を自分の馴染みのある大学の研究室にシフトさせた」。それが功を奏す。ミステリー小説『ラブ・ケミストリー』で『このミス』大賞・優秀賞を受賞し、執筆からわずか2作目で念願が叶った。

研究者と小説家の二足のわらじ。2度目の転機は40代の手前に訪れた。ヒットしたシリーズ作もあり小説家としては軌道に乗っていたが、製薬企業ではマネージャー職になれるかどうかの瀬戸際にあった。マネージャー職になるためには博士課程を修了するか、海外の大学に留学するといった経歴が必要で、「自分は製薬企業ではキャリアを積めておらず、マネージャー職になろうとする希望もなかった」という。

そして昨年、38歳でキッパリと研究者を辞め、専業作家としての道を歩むことを選択。苦渋の決断かと思えば、「40代のどこかで会社を辞めて作家になる」という人生設計を立てていたため、それが前倒しになっただけで迷いは一切なかった。気持ちは小説へと傾いていた。

小説としての骨格が決まれば、物語(ストーリー)として仕上げていく。小説の構想となるプロットからストーリーにしていく作業は、映画の創り方と似ていて、「どのページでイベントを起こすかは、プロットとしての技術論が確立されており、ベースがある」という。物語ができれば、ようやく執筆が始まる。執筆時間は1日3時間、朝昼夕と分けて集中して書く。

喜多さんは、小説創りの入り口として、コンセプト候補となるアイデアを貯めていくことにこだわる。デビュー以来、年に3冊を出版する目標を自分に課す。作家業としての足腰を支えているのは、「1日1アイデア」を創出するというルーティンだ。漫画やインターネット、新聞などで情報に触れながら、思いついたアイデアをノートにメモすることを欠かさない。「1年やれば365個の小さなネタが貯まる。思いついたアイデアのうち、99%は使い物にならないが、365個中3~4個の確率で本になる。1年に3冊出版するのであれば、逆算して1日一つずつアイデアを貯めていく必要がある」。継続は力なり。精度が低く、地道な作業だが、「駄目でもともとなので、アイデアを探すのはむしろ楽しい」という。『化学探偵Mr.キュリー』『恋する創薬研究室 片思い、ウイルス、ときどき密室』『創薬探偵から祝福を』のタイトルに代表されるように、喜多さんが出版した作品には化学や創薬にまつわる話が多く登場する。「化学には仕組みがあり、不思議な事象に対する答えも化学で説明できる。自分の作品で苦手意識



思いついたアイデアを書き込んだノート。“1日1アイデア”を日課としている

1日1アイデア創出が日課

大半はお蔵入りでも「楽しい」



首都圏を中心に店舗展開中!



インターンシップ開催中!

東京都: 20店舗 神奈川県: 4店舗
埼玉・千葉・山梨・栃木県: 各1店舗



株式会社メディカルファーマシー

本社: ☎162-0056 東京都新宿区若松町8-1
ホームページ <http://miki-ph.jp>